

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2019年 1月

「彼を知るために」「天からの良い知らせ(1)」「永遠の福音における第三天使の大いなる叫び」「インド風天ぶらパコラ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

天からの良い知らせ (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

彼を知るために

7

That I May Know Him

現代の真理

「永遠の福音における第三天使の大いなる叫び」

39

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

インド風天ぷらパコラ

44

お話コーナー

「ゲッセマネにて (II)」

46

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465 FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018年12月9日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty images on Front page, Sermon View
on page 40

準備

パウロは砂漠のさびしい所で、静かな研究と瞑想の時を十分に得た。彼は静かに自分の過去をふりかえり、悔い改めの確かなわざをなした。彼は真心から神を求めて、彼の悔い改めが受け入れられ、罪がゆるされたことを確かめるまで気を安めなかった。彼はこれから伝道するにあたって、イエスが彼と共にいてくださるという確証を得たいと切望した。彼はこれまで彼の生活を形造っていた偏見や言い伝えを一切捨てて、真理の源なる神の教えを受けた。イエスはパウロと交わり、彼の信仰を固め、知恵と恵みを豊かにお与えになった。

人の心が神の心と交わり、限りあるものが無限の創造主と交わるとき、身体や精神や魂に及ぼすその影響は計り知れない。そのような交わりの中に最高の教育がある。それが神ご自身の教育方法である。「あなたは神と和ら……ぐ(知る)がよい」これは神が人類にお与えになった教えである(ヨブ記 22:21)。…

「わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える務に、あなたを任じるためである。わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである」とイエスは言われた(使徒行伝 26:16-18)。

パウロはこれらの事を心の中でじっくり考えながら、「神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となった」意味をますますはっきり理解するようになった(コリント第一 1:1)。その召しは「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」から来たものであった(ガラテヤ 1:1)。自分の前にある働きの重大さを思っ、パウロは聖書をよく研究するようになった。それは彼が福音を、「知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。」また「霊と力との証明に」より、聞いた者の信仰が「人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」(コリント第一 1:17,2:4,5)。

パウロは聖書を探りながら、各時代を通じて「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれた」ことを知った。「それは、どんな人間でも、神のみまに誇ることがないためである」(コリント第一 1:26-29)。このようにこの世の知恵を十字架の光に照らしてみ、パウロは「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは……何も知るまいと、決心した」(コリント第一 2:2)。

その後、伝道の働きを通して、パウロは知恵と力の源であられるかたを見失うことがなかった。(患難から栄光へ上巻 132-135)

第8課 天からの良い知らせ(Ⅱ)

イエス・キリストの福音

バプテスマヨハネはイエスについて次のように説明しています。「... 見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1:29)。そのため、福音は、次のように適切に名づけられています。「... 神の子イエス・キリストの福音」(マルコ 1:1)。

イエスは、福音を宣布することによって公生涯を開始されました。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。『時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。』」(マルコ 1:14,15)。

彼は、救いと神の王国に関する良い知らせに人々の注意を向けさせ、悔い改めて福音を信じるようにと招きました。なぜなら、時が満ちたからです。イエスは、教えを説いただけでなく、人々に対して福音を実践しました。「そののちイエスは、神の国の福音を説きまゝ伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。」(ルカ 8:1)

イエスは、公生涯において、天の王国のために魂を救う働きに年月を費やされました。イエスは、国中を旅して、教え、病人をいやし、貧しい者を助けながら、「神の御国」を宣布しました。

前述の中で、福音は、わたしたちを罪の力から救う神の力であることが示されています。使徒ヨハネは、罪を「不法」と定義づけています(ヨハネ第一 3:4)。わたしたちは、イエス・キリストの福音を受け入れるとき、わたしたちはこのお方の力によって神の律法を守ることができるようになるのです。

『わたしが、それらの日の後、彼らに対して建てようとする契約はこれであると、主がいわれる。わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう』といい、さらに『もはや、彼らの罪とかれらの不法とを、思い出すことはしない』と述べている。(ヘブル 10:16, 17)。

そのため、神の民は、次のように描写されています。「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰(イエスの信仰)を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙示録 14:12)。

福音の普及

イエスは、弟子たちに対して次のように命じられました。「それゆえに、あなたがたは行って、全ての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタ

イ 28:19,20)。

このようにキリストによって与えられた任務は、最初、初期の教会によって実現しました。彼らが福音を宣布するために出ていくと、かつて見られたことがないほどの神の栄光の啓示がありました。聖霊に満たされて、教会は、世界をゆるがす働きをしました。一世代のうちに、福音は古代世界における全ての国々へ伝えられたのでした。

エルサレムの町は、非常に短期間のうちに伝道され、のちに迫害が生じたことにより、多くのクリスチャンたちはその都市を離れざるを得なくなったとき、福音は、他の諸都市にも広まりました。二年という期間で(使徒行伝 19:10)、ユダヤ人もギリシャ人も小アジアのすべての人が福音のメッセージを聞いたのでした。そこから福音は、北アフリカや南ヨーロッパへ広まりました。

「ただし、あなたがたはゆるぐことがなく、しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから移り行くことのないようにすべきである。この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである。」(コロサイ 1:23)

預言における福音

福音は、最初の教会と共に死滅してはなりません。キリストによって与えられた任務は、すべての時代のためであり、キリストは終わりの時代について述べながら、次のように預言なさいました。「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そして、それから最後がくるのである。」(マタイ 24:14)

福音の最後のメッセージは再び、極めて短期間のうちに、世界のあらゆる住民へ伝えられるのです。もともと、そのときには、続く次回において福音の重要な部分をなす特別なあるいは追加的な真理があります。福音における重要な部分として加えられる。使徒ペテロは、それらを「いま持っている真理(現代の真理)」として言及しています(ペテロ第二 1:12)。それは現在の主題、現在のメッセージですが、決して過去の真理を損なうものではありません。

最後の福音のメッセージ

真理とは、各時代における神のメッセージの蓄積です。現代の真理には、今日のための特別なメッセージが含まれています。これらの最後のメッセージは、黙示録の 14 章に含まれています。

最初の天使は裁きの時の始まりを告げています。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。』」(黙

示録 14:6,7)。

中空を飛んでいるその天使は、永遠の福音、つまり、神の力を保有していることに注目しましょう。聖書は、天使が永遠の福音を宣布しながら来るとは述べていません。そうではなく、天使がその福音をたずさえてきたとあります。この天使は、人々あるいは運動の象徴です。ですから、この最後の時代に、地に住むすべての人に宣布するために永遠の福音をたずさえている民がいるということです。彼らはすべての人に、創造主として真の神を礼拝し、このお方の裁きの開始を宣布するように呼びかけます。

第二の天使は、大いなる教会の墮落と背教について告知します。「また、他の第二の御使が続いてきて言った。『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』」(黙示録 14:8)。

第二の天使あるいは運動は、非常に厳格な宣言と共に、第一の天使に加わります。

第三の天使は、獣の刻印を受けることについて警告を与えます。「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない』。」(黙示録 14:9-11)。

この第三の天使は、第一の天使、第二の天使と共に、この世に対して最後の警告のメッセージを伝えます。これらのメッセージの内容は、次号以降に詳しく研究していきます。

これら3人の天使のメッセージのクライマックスは、警告を心に留め、永遠の福音に対して真実を保ってきた忠実な残りの民の啓示です。「しかし、女は自分の場所である荒野に飛んでいくために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびから逃れて、一年、二年、また半年の間、養われることになっていた。」(黙示録 12:14)。

この「最後の福音のメッセージ」は、全世界へ伝えられます。なぜなら、その後、直ちにイエスの再臨が告知されるからです。全ての国民、部族、国語、民族が福音を聞いたなら、何が起こるのでしょうか。「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後がくるのである。」(マタイ 24:14)。

親愛なる友人の皆さん、わたしたちの祈りは、そのとき、皆さんの運命が、神の福音を受け入れ、従ってきた人々の運命でありますようにというのが、わたしたちの祈りです(ペテロ第一 4:17)。

彼を知るために

That I May Know Him



1月

1月1日

倉の錠を開けなさい

「すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え」(エペソ 3:8)

神の言葉には、わたしたちが全生涯をかけて探究することのできる豊かな真理の脈がある。しかしわたしたちは、その尊い貯えを見はじめたに過ぎないことを知る。…わたしたちにとって、無尽蔵の富がある。わたしたちが神とイエス・キリストの栄光の富を理解するには、永遠という時間がかかる。…

キリストは「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ 7:37)と言われた。あなたは泉を飲み尽くしただろうか。それはない。それは無尽蔵なのである。あなたが、必要を感じたその時に、飲むことができ、何回も飲むことができる。泉はいつも満ちあふれている。そして、あなたは一度でも、その泉から飲んだなら、自分の渇きをいやすために、この世の破れた水がめに水を求めることはなくなるであろう。あなたは、最大の快樂や娯楽や遊びや、戯れなどを、どのように見いだすことができるかなどと研究しなくなるであろう。それは当然である。なぜならあなたは神の都に喜びをもたらす流れから飲んだからである。あなたの喜びは満ちあふれる。なぜなら、キリストがあなたの中におられるからである。(ビュー・アンド・ハルド 1892年3月15日)

エホバ、インマヌエルは、—「知恵と知識との宝が、いっさい隠され」「満ちみちているいっさいの神の徳」がやどっているお方である(コロサイ 2:3, 9)。そしてわたしたちが主の性質を受けようとますます心を開くにつれて主と一つになり、主を知り、主をわがものとするようになる。また主の愛と力を知り、キリストの測り知れない富を持ち、「また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされ」「その広さ、高さ、深さ」をますます理解するようになる(エペソ 3: 19, 18)。—「これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義であると主は言われる」(イザヤ 54:17)のである。(祝福の山 43)

わたしたちは飢えたり、渇いたりする必要はない。天の倉がわたしたちのために開かれている。その錠とは何であろうか。それは、神の賜物である信仰である。倉の錠をあけ、その豊かな宝を手に取りなさい。(ビュー・アンド・ハルド 1892年3月15日)

知恵のはじまるところ

「主を恐れることは知恵のもと（はじまり）ある、聖なる者を知ることは、悟りである。」（箴言 9:10）

神が人にお与えになった何になれるかという能力と、人が実際に到達する卓越さの度合いとの間には大きな相違がある。（ビュー・アウド・ハルト 1883年9月25日）

神の言葉は、人の手に届く最も価値ある知識の源だけでなく、最も効力のある教育の方法を提示している。理解力は扱うべき主題の重要性に順応する。もし、取るに足らない、ありきたりのことばかりに専念して、偉大な永遠の真理を理解するために熱心な努力を奮い起こそうとしないなら、それは発育が妨げられ、弱くなる。こういうわけで知育の手段として聖書の価値がある。…それらはまっすぐに、人の心に提示される最も高められ、最も高尚な、そして最も驚くべき真理の瞑想へと導く。それらはわたしたちの思想を、万物の無限なる創始者へ向かわせる。わたしたちは永遠の神のご品性が表されているのを見、また主が父祖や預言者たちと親しく語られるみ声を聞くのである。わたしたちは主のみ摂理の神秘や、すべて思慮深い人の注意を引きつけてきたが、啓示の助けなしには人知が解決することのできない大問題が説明されているのを認めるのである。それらは、単純でありながら崇高な神学をわたしたちに理解させる。子供でも把握できるが、最も強い知力をも当惑させるほど遠大な真理を提示するのである。神のみ言葉を厳密に探り、より理解すればするほど、研究者はその向こうに無限の知恵と知識と力があることをまざまざと悟るようになる。…

もし青年が、ダニエルのように天来の教師から学びさえすれば、主をおそれることが知恵のはじめであることを知るようになる。…神に献身し、このお方の恵みの保護と活気づける御霊の感化力のある人は、単なる世俗の人よりも鋭い知力を示す。彼らはすべての機能を最高に、そして最も高尚に働かせるところまで到達できるのである。（同上）

1月3日

だれが神を知ることができるか

「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。」(ヨブ 11:7)

わたしたちは探し求めることによって、神を見出すことはできない。しかし父の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿である御子において神はご自身を表しておられる。もしわたしたちが神を知りたいと願うならキリストのようにならなければならぬ。…キリストを個人的救い主として、信仰によって、純潔な生活を送るならば、信者はもつとはっきりとした高貴な神の概念に到達するであろう。……

永遠の命は、神に対する愛と人に対する愛という、神の律法の二大原則に従うすべての人に与えられる報酬である。最初の四つの戒めは神に対する愛を明示し、命じている。残りの六つはわたしたちのまわりの人に対する愛である。これらの戒めに対する従順は神の本当の救いの知識を持っているということ人をあらわすことのできる唯一の証拠である。神に対する愛は、キリストがそのために死なれた人々に対する愛によってあらわされる。雲の柱で覆われている間に、キリストは、この愛に関する指示をお与えになった。ご自分の選ばれた民がお互いの交わりにおいて、守るべき法則として主は天の原則をはっきりと明らかに制定された。これらの原則をキリストは人性を取られたご自分の生活においてあらわされた。ご自分のみ教えの中で、主は主に従う人の生活を支配すべき動機を表された。……

真理を受け入れることによって、神の愛にあずかる人々は、神の愛のメッセージを他の人々に伝えるために、熱心に自己犠牲的な努力をすることによってその証拠を示す。こうして彼らはキリストの共労者になる。神に対する愛とお互いに対する愛は金の鎖でキリストへ結びつける。彼らの命は清められ高められた一致により、主の命に結びつけられる。……この結合はキリストの愛の豊かな流れを心に絶えず流れ込ませ、そこから他の人への愛となって再び流れ出る。

神を知るために、すべての人々が必ず持たなければならない資質は、キリストのご品性の完全さを特徴づけるもの、すなわち、主の愛、主の忍耐、主の無私の精神である。これらの特質は親切な心で親切な行いをすることによって養われる。(ユース・インストラクター 1900年3月22日)

表面的な知識では十分ではない

「神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとしたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。」(コロサイ 1:27)

神の言葉には、わたしたちが理解していない多くの奥義がある。そしてわたしたちのうちの多くの者は、キリストに関する知識をわずかに受けはじめると満足して自分の研究を止めてしまう。人の思いに対する神のご目的が少し明らかにされ始め、またわたしたちが神のご品性の知識をわずかでも受け始めると満足して、神のみ言葉のうちにわたしたちのためにある光をすべて受けてしまったかのように思う。しかし、神の真理は無限である。わたしたちは勤勉な努力により真理の脈を掘り、隠されている貴重な宝石を発見するべきである。…イエスは弟子たちに「聖書を…調べ」(ヨハネ 5:39) ようにと命じられたとき、言葉通りのことを指示されたのである。調べるとは聖句と聖句を、また霊的な事柄は霊的な事柄と比較することである。わたしたちは表面的な知識に満足すべきではない。(レビュー・アソド・ハルド 1889年6月4日)

わたしたちは主がご自分の民のためになそうとしておられることを半分も理解していない。…わたしたちの嘆願は信仰と悔い改めと混じりあって、神がご自分の聖徒に知らせようようにとされている奥義の理解を求めて神の許へ上るべきである。…天使の筆も、現された救いの計画の栄光をすべて描くことはできなかった。聖書はキリストがどのようにわたしたちの罪を負い、悲しみを担われたかを述べている。いつくしみとまこととはカルバリーの十字架でどのように共に会い、義と平和とはどのように互いに口づけし、キリストの義が墮落した人間にどのように分け与えられているかがここに示されている。そこには無限の知恵と無限の義、そして無限のあわれみと無限の愛が、掲げられている。愛と知恵の深さと高さ、そして長さや広さ、またすべての現在の知識が、救いの計画の中に知らされている。(同上)

自分の心に真理を望み、生活と品性にその力の働きを切望している者は、必ずそれを得る。主は「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」(マタイ 5:6) と言っておられる。(同上)

1月5日

永遠の言葉キリスト

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」(ヨハネ 1:1-3)

言であり、神のひとり子であったキリストは、永遠の父と一つ、すなわち、その性質、品性、目的が一つであって、神のあらゆる計画と目的に参加 できる唯一のおかたであった。「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』 ととなえられる」(イザヤ書 9:6)。「その出るのは昔から、いにしえの日からである」(ミカ書 5:2)。また、神の御子は、ご自身について、こう言明された。「主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。……また地の基を定められたときわたしは、そのかたわらにあつて、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽し」んだ(箴言 8:22-30) 父は御子 によって天のすべての住民をお造りになった。「万物は、……位も主権も、支配も権威も、みな御子にあつて造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである」(コロサイ 1:16)。天使たちは、神に仕える者で、神のみ前から流れ出る光で輝き、みこころを果たすためにすみやかに飛ぶことのできる翼が与えられているのである。しかし、神の受膏者、「神の本質の真の姿」、「神の栄光の輝き」であられる御子は、「その力ある言葉をもって万物を保つておられ」て、それらをすべて支配しておられる(ヘブル 1:3)。(人類のあけぼの上巻 2, 3)

キリストは本質的に、そして最高の意味において神であられた。…神の神聖なひとり子である主イエス・キリストは、永遠から存在し、はっきりとした個性をもち、そして父と一つであられた。主は天のすぐれた栄光であられた。主は天の知的住民の指揮者であられ、天使の崇敬を、主の当然の権利として受けておられた。……

キリストは世の基が据えられる前に、父とひとつであられたという真理には、光と栄光がある。これは暗い所に輝いている光であり、神聖な本来の栄光でそこをまばゆく照らしている。(セクレット・メッセージ 1巻 247, 248)

「わたしは在る」という偉大な方

「イエスは彼らに言われた、『よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである』。(ヨハネ 8:58)

わたしは在るという言葉は永遠の臨在を意味しており、過去、現在、将来において神と等しくあられることである。主は過去の歴史の最も遠い出来事を知っておられる。また、わたしたちが日常の事柄をはつきり見るように遠い将来のことをご覧になる。わたしたちは、自分たちの前に何があるかを知らない。そしてもし知っていても、わたしたちの永遠の幸福には役に立たないであろう。わたしは在るという偉大な方に信仰を働かせ信頼する機会を神はわたしたちに与えておられる。…わたしたちの救い主は「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでた。そしてそれを見て喜んだ」(ヨハネ 8:56)と言われた。キリストがその王衣と王冠を捨てられ、天の王宮の名誉ある地位を捨て去って、人性をとり、人の子たちの間を歩まれる 1500 年も前にアブラハムは、「主の日を見て喜んだ。」「そこでユダヤ人たちはイエスに言った、『あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか。』イエスは彼らに言われた『よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである』(ヨハネ 8:57, 58)

キリストは永遠の臨在という概念を説明するために、モーセに与えた神の偉大なる名を用いておられる。(出エジプト 3:14 参照)。イザヤもまたキリストを見た。そして彼の預言の言葉は重要性で満ちている。「ひとりのみどりごが、われわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は『靈妙なる義士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」とイザヤは言った(イザヤ 9:6)。主は彼の言葉を通して言われた。「わたしはあなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救い主である。…恐れるな、わたしはあなたと共にいる…ただわたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない。…あなたがたはわが証人であると主は言われる。わたしは神である。今より後もわたしは主である。…わたしは主、あなたがたの聖者、イスラエルの創造者…あなたがたの王である」(イザヤ 43:3-15)。…イエスはわたしたちの世界に来られたとき、ご自分のことを「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のもとに行くことはできない」(ヨハネ 14:6)と宣言された。……

主は偉大な「わたしは在る」お方として信じられ、仕えられなければならない。そしてわたしたちは、主を絶対的に信頼しなければならない。」(手紙 1895 年 119)

1月7日

創造における共労者

「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべてのこのものとを治めさせよう。』神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:26, 27)

地球が創造され、その上に生物が造られた後、天父と御子は、サタンの墮落前から計画されていたご自身のかたちにかたどって人間を造るというご自分の目的を実行なさった。天父と御子は、地とその上のすべての生物の創造において一緒にお働きになった。そしていま神は、御子に『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう』とおおせになった。(生き残る人々 20, 21)

アダムとエバは、創造の手によって造られたとき、肉体的にも知的にも靈的にもすべて完全な資質を持っていた。神は彼らのために園を設けられ、彼らのまわりに、愛らしく目に美しいすべてのものを、そして彼らの肉体的に必要なすべてのものをお備えになった。…

その聖なる二人は、自然をこの上なく美しい光景としてながめていた。茶色の大地は生き生きとした緑のじゅうたんでおおわれ、自己繁殖し、自己永続する無限の変化に富んだ花々に彩られていた。灌木や花やつるのある植物は、その美しさやかおりで感覚を楽しませていた。いろいろな種類の高い木々には、あらゆる種類の、よい香りの果物がたわわになっていた。…

アダムとエバは、草の芽一つ一つに、そしてあらゆる木々や花にたどることのできた神のみ手のわざと栄光を認めた。彼らを取り巻く自然の愛らしさは、鏡のように天の父の知恵や、素晴らしさや、愛を反映していた。彼らの感動や賛美の歌は、気高い天使の歌と、無心に自分たちの音楽を喜び歌う幸福な小鳥たちと調和して、美しくおごそかに、天に上っていった。どこにも病気も、衰えも、死もなかった。命、命が目の及ぶすべてのところにあった。大気に命が吹き込まれていた。…

アダムは、彼が神のみかたちに創造されたこと、また義と聖において主に似ていることを反映することができた。彼の思いは継続的な修練と発達また精練と高貴な気高さが可能であった。なぜなら、神が彼の教師であり、天使が彼の友であったからである。(ビュー・アソド・ハルド 1874年2月24日)

宇宙にとって悲しむべき日

「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。」(ローマ 5:12)

わたしたちの最初の両親が、エデンの美しい園に置かれたとき、彼らは神に対する彼らの忠誠に関して、試みられた。彼らは神への奉仕を選ぶことも、あるいは不従順によって、神と人間の敵と同盟を結ぶことも自由であった。…もし彼らが神の戒めを軽んじて、へびを通してサタンが語ってくるとき、彼の声に聞き従うならば、彼らはエデンにおける自分の所有を失ってしまうばかりではなく、命そのものを失ってしまうのであった。(バィブル・エコー 1899年6月24日)

アダムに与えられた最初の道徳的な教訓は、自己否定の教訓であった。自己統治の手綱は彼の手に置かれていた。判断と理性、また良心が統治すべきであった。…

アダムとエバは一つを除いて園にあるどの木からでもとって食べることが許されていた。禁令はただ一つだけであった。禁じられた木は、園にある他の木と同様に魅力的で美しかった。それは知識の木と呼ばれた。なぜなら、神がその木の実を食べることについて、「取って食べてはならない」(創世記 2:17)と言われた木は、取って食べると、罪の知識、すなわち不従順の経験を得るからであった。(ビュー・アソッド・ハルト 1874年2月24日)

全宇宙は強い関心をもってアダムとエバの立場を決定するその戦いを眺めていた。罪の創始者であり、彼の欺瞞的な理論によって、神の律法の効力をなくそうとしているサタンの言葉を天使たちはどれほど注意して聞いたことだろう。天使たちは、聖なる二人が誘惑者によって惑わされ、サタンの策略に陥りはしないだろうか、どれほど案じてなりゆきを見ていたことか。天使たちは、その聖なる二人が彼らの信仰と愛を御父と御子からサタンへと移すだろうか、彼らはサタンの偽りを真理として受け入れるのだろうかと自問した。(SDA バィブル・コメント [E・G・ホワット・コメント II 卷 1083])

アダムとエバは、禁じられた木の実を食べることは非常に小さな事柄なので、神が宣告されたような、恐ろしい結果になるはずがないと自分に言い聞かせた。しかし、この小さな事柄が罪であり、神の不変の聖なる律法を犯すことであった。それは、わたしたちの世界に死と、言うに言われぬ苦悩の水門を開いたのであった。…わたしたちは罪をささいなことと考えてはならないのである。(ビュー・アソッド・ハルト 1888年3月27日)

1月9日

罪の神秘

「わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった。(エゼキエル 28:14, 15)

罪の存在を理由づけようとして、罪の起源を説明しようとすることは、不可能な事である。しかし、罪の起源についてもその処分についても悪に対する神のすべての取扱いの中に、神の公義とあわれみが完全にあらわされているということに関しては十分に理解できるのである。聖書の中に何よりはつきりと教えられていることは、罪が入ってきたことに対して、神にはなんの責任もないということである。罪は侵入者であって、その存在については理由をあげることができない。罪は神秘的であり、不可解であって、その言い訳をすることはそれを弁護することになる。もし罪の言い訳があつたり、その存在の原因を示すことができたなら、それはもはや罪ではなくなる。罪についての唯一の定義は、神のみ言葉の中に与えられている定義である。それは「罪は不法である」(ヨハネ第一 3:4)ということである。すなわち罪は神の統治の基礎である愛という大法則と戦っている原則が外にあらわれた結果である。(各時代の大争闘下巻 228)

罪は利己心から起こった。蔽うことをなす天使ルシファーが、天の第一位を望んだ。彼は天使たちを支配し、彼らを創造主から引き離して、自分に忠誠を誓わせようと試みた。…こうして彼は天使たちを欺いた。こうして彼は人類をだました。サタンは彼らに神のことばを疑わせ、神の恵みを信じさせないようにした。…こうして彼は人々をひっぱって神への反逆に加わらせ、わざわいの夜がこの世にやってきた。(各時代の希望上巻 4)

罪は完全な宇宙に出現した。…罪の発端、あるいは発展の理由は説明されたことはなかったし、説明できるものではない。審きの座が設けられ、書物が開かれる最後の大きな日においてさえも、そうである。…その日に、罪には原因がなく、あつたこともなかったということが証明されるであろう。サタンと彼の使たち、また、サタンと共に自分を最終的に神の律法に対する違反者としたすべての人間に最終宣告がなされる時、すべての口は止むであろう。最初の大きな反逆者から最後の罪人まで、反逆を起こした群れは、なぜ神の律法を破ってきたのかと、尋ねられたときに口がきけない。どんな答えもできないのである。(サインズ・オブ・サ・タイムズ 1890年4月28日)

魂に入れて下さった神の恨み

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。(創世記 3:15)

アダムとエバは、罪の招いた判決を待ちながら、神の前に犯罪者として立っていた。しかし、彼らがあざみといばら、すなわち彼らの運命となるべき悲しみと苦悩、そして彼らが帰らなければならぬ地のちりについて聞く前に、彼らは希望を起こさせるみ言葉を聞いたのである。彼らは苦しまなければならないけれども、…最後の勝利を望み見ることができるのであった。

神は「恨みをおく」と宣言なさる。この恨みは超自然的におかれたもので、自然にいただくものではない。人間が罪を犯したとき、彼の性質は悪いものとなった。そして、サタンと調和し、一致するようになった。天使をそそのかしたように、わたしたちの最初の両親をそそのかすことに成功した高慢な横領者は、天の統治に敵対する自分の企てすべてに、彼らの忠誠と協力を確保するものと期待していた。…しかし、女のすえがへびのかしらを砕くということを聞いたとき、サタンは人間の性質を墮落させることに成功したが、……何か神秘的な過程によって、神は、人間に失った力を回復させ、人が自分の征服者に抵抗し、勝利することが可能になることを知った。

サタンに対する恨みを起こすのは、キリストが魂に植えつけられた恵みである。この恵みがなければ、人間はサタンのとりこ、すなわちいつでもサタンの命じることをなす用意のできた僕であり続けるはずであった。魂の中に植えつけられた新しい原則は、これまで平和であったところに争闘を生じさせる。キリストが分け与えられる力は、人間が、暴君であり横領者である者に抵抗することを可能にする。人が罪を愛する代わりに、忌み嫌うときはいつでも、また人が心の中で揺れている感情に負けないで征服するとき、完全に天から与えられたその原則が働いていることを知るのである。聖霊が絶えず人に与えられていなければならない。さもなければ人間は、闇の力に対して、戦う用意ができないからである。(レビュー・アンド・ハラルド 1882年7月18日)

わたしたちは、キリストが人間とへびの間におかれた恨みを受け入れないでおられようか。…わたしたちには、「イエス・キリストの力によってわたしは勝利者になる」と言う権利があるのである。(原稿 1911年31)

1月11日

希望の星

「その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1:29)

墮落した人間に対して、無限の犠牲を通して救いが提供されるという救いの計画が現された。神の愛する御子の死以外に、人間を贖うことはできなかった。そしてアダムは、罪人のためにそのような贖いを用意してくださる神の慈悲に驚いた。神の愛を通して、希望の星が罪人の前に広がっている恐ろしい将来を明るくした。犠牲と供え物の儀式を通して、キリストの死が罪を犯した人間の前につねに保たれるべきであった。それにより人が罪の性質と不法の結果、そして聖なる供え物による功績を、よりよく理解できるためである。もし罪がなかったならば、人間は死を知らなかったであろう。しかし、罪のない犠牲を自分の手で殺すことにより、人間は罪の実、すなわち身代わりである神の御子の死を見たのである。人間は自分が犯した律法の不変的な性質を知り、自分の罪を告白する。彼は、神の小羊の功績に頼るのである。…

人間の身代わりとなり、人の上にふりかかるはずであったのろいを負うことによって、キリストは人に代わってご自分の父の律法の神聖で高められた誉れを維持することを誓われた。神はキリストのみ手に世界を与えられた。それによってこのお方が律法の拘束力のある要求を完全に擁護し、一つ一つの原則の聖なることを明らかになさるためであった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1893年2月20日)

動物の犠牲は、神の愛する御子の罪のない犠牲を象徴し、十字架上の主の死を指し示していた。しかし、十字架において、型は実体と会い、儀式の制度は働きを終えたのである。……

神の御子は、すべての摂理をおおっている贖いの偉大なる計画の中心であられる。主は「世のはじめからほふられた小羊」(黙示録 13:8 英文)であられる。主は人類の恩恵期間のすべてを通じて、アダムの墮落した息子、娘たちの救い主であられる。「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝 4:12)。(同上)

あらわされた神のご品性

「しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」(ローマ 5:8)

人間の墮落は、その結果もすべて含めて、全能の神に隠れてはいなかった。贖いはあとからの思いつき、つまりアダムの墮落の後で作られた計画ではなく、むしろ永遠のご目的であった。それは地球という小さな原子の祝福のためばかりではなく、神が造られた全宇宙の幸福を成就するためにささげられたものであった。…

人が罪を犯した時に、全天は悲しみに満たされた。…神のご性質との調和を乱し、神の律法の要求に従わないことにより、破滅だけが人類の前にあった。神の律法が、神のご品性と同様に不変であるから、人間には、何らかの方法で、彼の罪が許される計画が考案されない限り、そして人間の性質が新たにされ、人間の心が神のみ姿を反映するように回復されるまでは、望みはあり得ないのである。神の愛は、そのような計画を心に抱いておられた。…

創造の働きにおいて、キリストは神と共におられた。主は神と一つであり、等しくあられた。…人間の創造主であられる彼だけが、人間の救い主であり得た。天のいかなる天使も、御父を罪人にあらわすことはできず、そして人間を神に対する忠誠に引き戻すことはできなかった。しかしキリストは御父の愛をあらわすことがおできになった。なぜなら神は、世をご自分に和解させることにより、キリストのうちにおられたからである。キリストは、聖なる神と、失われた人間との間にあって「われわれふたりの上に手を置く」ことのできる「仲介者」になることがおできになった(ヨブ 9:33)。…主は罪の罪悪と恥、一神の御目に非常に不快なものであるために罪が御父との間を決定的に裂くものとなるその罪一のために、ご自身を提供されると申し出られたのである。キリストは悔い改めた者を回復し、信じる魂を神と調和させるために、人間の墮落と、苦悩の深みにまで達することを申し出られた。世の初めからほふられた小羊であるキリストは、アダムの墮落した息子たちのための犠牲、身代わりとして、ご自身をささげられた。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1893年2月13日)

創造と贖いを通して、また自然とキリストを通して、神のご品性の栄光はあらわされている。「ひとり子」を与えるという神の愛の表現により、すばらしい…神のご品性が、宇宙の知性ある者たちの前にあらわされている。(同上)

1月13日

本当に驚くべき愛

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16)

人類の贖いの働きを遂行されるとき、御父はご自分のみわざの成就に必要なものは、どんなに大切なものであっても、何も惜しまれなかった。このお方は人間のために機会を作り、人間にご自分の祝福を注がれた。主は救うために来られるその人々に天の全宝庫を開放するまで、恩寵に恩寵を、賜物に賜物を積まれた。宇宙のすべての富を集めて、ご自分の神性のすべての資源を開放されたとき、神はすべてを人が用いるためにお与えになった。それらは無償の賜物であった。あふれるほどの愛は、神聖な大気が、世を巡っているように循環している。永遠の神が御子において人性をおとりになり、最高の天に人間を連れていってくださるとは、なんとという愛のあらわれであろう。

全天の知的存在者たちは、地上すなわちサタンが自分の領土であると主張している地上で進行している戦いを強い関心をもって眺めていた。毎瞬間が、永遠の現実を伴って重要であった。戦いはどのように終わるのであろうか。天使たちは、神の正義が表され、暗黒の君とその支持者に対して主の怒りが引き起こされるを待っていた。しかし、見よ、あわれみが支配した。神の御子が、有罪を宣告するために世界においでになることができたその時に、義また平和として、単にアブラハム、イサク、ヤコブの子孫だけではなく、全世界を、すなわち主を道であり真理であり命であると信じるアダムの息子、娘すべてを救うため来られたのであった。何というエホバの愛のあらわれであろうか。これは比類のない愛である。(ユース・インストラクター 1897年7月29日)

わたしたちの贖い主は、ご自分の功績を通して、神の愛がご自分を信じる魂に注ぎ込まれるべきことを決心された。わたしたちの命として、神の愛の活力がわたしたちの性質のすべての部分に行きめぐらすべきである。こうしてそれぞれがキリストのうちに宿っているように、わたしたちのうちに宿るためである。生きた信仰によってキリストと結びあわされるとき、神はわたしたちを、キリストの神秘的なからだ、すなわちキリストがその栄光のかしらであられるからだの肢体として愛されるのである。(手紙 1892年11)

キリストの一象徴であるイサク

「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、『イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう』と言われていたのであった。」
(ヘブル 11:17, 18)

イサクを供え物とすることは、神の御子の犠牲を前もって示すために、神によって立案された。イサクは、世の罪のために犠牲をささげられた神の御子の一象徴であった。神はアブラハムに人類に対する救いの福音を印象づけようとなさったのである。…無限の神が人間を滅びから救うために、御子をお与えになるという自己否定がいかにも偉大であるかを、アブラハムが自分自身の経験で理解できるようにされたのである。

アブラハムにとって、自分の息子を犠牲として捧げるようにという命令に従って忍んだ精神的苦痛ほど大きな苦痛は無かった。……イサクが『火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか』と尋ねるとき(創世記 22:7)、張り裂けそうな心と震える手でアブラハムは火を用意する。しかし、アブラハムは、今は、彼に話すことができない。父と子が祭壇を築き、そして、長い旅の間中、アブラハムの心を苦しめていたこと、すなわちイサク自身がいけにえであるということ、それを彼に知らせなければならない恐ろしい瞬間が来る。…子は自分の父親の清廉潔白を信じているので、犠牲になることを甘んじて受ける。しかし、すべてが用意され、父の信仰と子の従順が完全に試されると、神の御使はアブラハムのふりあげた手を止めて、それで充分であると彼に言われる。「あなたの子あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(創世記 22:12)。(ユース・インストラクター 1900年3月1日)

わたしたちの天父は、十字架の苦悩にご自分の愛する御子を引き渡された。天の軍勢は神の御子の謙遜と魂の苦悶を目のあたりに見た。しかし、イサクの場合のように彼らが介入することは許されなかった。犠牲を中止させる声は聞かれなかった。神のいとし子であり、世の救い主であられる方は、死によって頭をたれるまで侮辱され、あざげられ、愚弄され、非常な苦痛を受けられた。無限のお方が、その聖なる愛とあわれみについて、これより、偉大な証拠をわたしたちに与えてくださることが出来るだろうか。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された方が、どうして、御子のみならず万物をも賜らないことがあろうか」(ローマ 8:32)。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1876年4月1日)

1月15日

神秘的なはしごキリスト

「時に彼は夢をみた。一つのはしごが地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。」(創世記 28:12)

ヤコブが自分の家を離れて放浪者となり、神秘的なはしごを示されたときの経験は、…救いの計画に関する偉大な真理を教えるよう意図したものであった。…

はしごはキリストを表していた。主は天と地の交わりの道であり、天使は墮落した人類と絶えず交わるために、往来している。主が「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」と言われたとき、ナタナエルに対するキリストのみ言葉は、はしごの象徴に調和していた(ヨハネ 1:51)。ここで、贖い主はご自分を天と地の間の交わりを可能にする神秘のはしごであると言われたのである。……

人性をお取りになることによって、キリストははしごをしっかりと地上におすえになった。はしごは最も高い天にまで届き、神の栄光はそのいただきから輝き、その全長を照らし、天使は神から人への使命を、そして人から神への嘆願と賛美を携えて行き来している。…ヤコブの幻の中で、キリストにある人性と神性の結合が表されていた。天使がはしごを行き来するとき、神は御子の功績のゆえに、人の子らを是認をもって見おろしておられるお方として表されている。…

永遠の命を得ることは簡単なことではない。生きた信仰によって、わたしたちは、一段一段と必要な階段を見てつかまりながら、はしごを上に向かって登りつづけなければならない。それでいながら、わたしたちは一つの聖なる思想も、一つの利己的でない行為も自分では作り出すことができないことを理解しなければならない。人に何らかの徳があり得るとすれば、それはキリストを通してのみである。…しかし、わたしたちは主がおられなければ何もできない一方、主とのつながりにおいて、わたしたちのなすべきことがある。わたしたちはいつも霊的な警戒をゆるめてはならない。わたしたちは、いわば天と地の間につり下げられているようなものだからである。わたしたちが霊的警戒をゆるめてよい時はない。わたしたちはキリストにしっかりとつかまり、キリストによって登っていき、自分の魂を救うことにおいて、主との共労者にならなければならないのである。(レビュー・アンド・ヘアド 1890年11月11日)

前もって示されたキリストの初臨

「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び。」(ヘブル 11:24, 25)

モーセがまさに王座の陰に座していたとき、神の御霊は彼の心をかきたて、彼の同胞を最低の地位と奴隷状態へ圧迫していた押しつぶすばかり重圧を取りのけるように動かされた。彼の心はあたかも自分自身がレンガ作りの窯で労働をさせられている奴隷であり、最低の地位にいるかのような悲しみに心を痛めた。彼らは残酷なむちの下で苦しんでいる奴隷であった。彼らはパロから最も身分の低い農奴にいたるまで全エジプト人から軽蔑され、恥を受ける者であった。

しかし主はこの圧迫された民族を連れ出す者としてモーセを選び出され、40年の放浪により、神の訓練の下で働きの準備をさせられた。自分の同国人の邪悪な性質を理解しながら、またどれほど強情で無分別であるかを知りながら、そして彼らが自分を裏切るだろうことを理解した上で、彼自身は器となる権利をみな放棄してしまったと思いながらも、民の救出を成し遂げる方法と手段を考えていた。しかし、神は火で燃えながらも焼きつくされない柴の中にご自身を現され、モーセをご自分の代行者として選ばれた。…

モーセは神の共労者として受け入れられた。もしヘブルの捕らわれ人の救出という大目的に幾分かでも役割を果たすなら、軽蔑と憎しみ、また迫害とおそらくは死でさえも自分の運命となることを彼は知っていた。……彼はかつてパロの軍隊の将軍として絶大な人望を得たことがあった。そして彼は今自分の名前が曲解され、偽り伝えられることを知っていた。しかし彼は「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富」と考え、尊んだ(ヘブル 11:26)。彼は前途の王の冠を脇に置き、圧迫され、悩んでいる彼の国民の重荷を引き受けた。(手紙 1896年 116)

モーセはイスラエルの子らを縛っているくびきを壊すために、神に選ばれた。そして…その働きにおいて、彼は人類家族の上にあるサタンを破り、サタンの力によって捕虜にされている人々を救い出すキリストの再臨を前もって示した。(教会への証 1巻 291)

1月17日

打たれた岩

『見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つてであろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むことができる』。モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのように行った。(出エジプト 17:6)

荒野におけるイスラエル人のかわきをいやした泉の水は、まず、最初にホレブの打たれた岩から流れ出た。彼らが、放浪していた全期間を通じて、必要な場合は、どんなところでも、神のあわれみ深い奇跡が行なわれて、水が供給された。…

清水をイスラエルのために流れ出させたのは、キリストが、ご自分のみことばによってなされたのである。「彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」(コリント第一 10:4)。

彼は、霊的的祝福と同様に、すべての物質的祝福の源である。真の岩なるキリストは、彼らの放浪期間を通じて、彼らと共におられたのである。「主が彼らを導いて、さばくを通らせられたとき、彼らは、かわいたことがなかった。主は彼らのために岩から水を流れさせ、また岩を裂かれると、水がほとぼり出た。」「かわいた地に川のように流れた」(イザヤ書 48:21, 詩篇 105:41)。…

打たれた岩は、キリストの型で、この象徴によって、最も尊い霊的真理が教えられた。打たれた岩から生命を与える水が流れ出たように、「神にたたかれ」「われわれのとがのために傷つけられ」「われわれの不義のために砕かれた」キリストから、失われた人類のための救いの川が流れ出たのである(イザヤ書 53:4,5)。岩が一度打たれたように、キリストも「多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた」のである(ヘブル 9:28)。われわれの救い主は、二度と犠牲になられるべきではなかった。キリストの恵みの祝福を求めるものは、悔い改めて、主のみ名によって、心の願いを述べるだけでよいのである。こうした祈りは、イエスのみ傷を万軍の主のみ前にもたらし、新たにもう一度、生命を与える血潮を流れさせるのである。……

かわききった荒野に……流れ出た新鮮な水は、キリストだけが与え得る神の恵みの象徴である。これは、命の水のように魂をきよめ、生きかえらせ、力づける。キリストが内住しておられる者のうちには、つきない恵みと力の泉がある。(人類のあけぼの下巻 8-10)

生ける水

「みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。(第一コリント 10:4)

キリストは、二つの型を結合された。彼は、岩であり、生きた水である。

この同じ美しく意味深い象徴が、聖書全体に用いられている。キリストが来られる幾世紀も以前に、モーセは彼を救いの岩としてさし示した(申命記 32:15 参照)。詩篇記者は、彼のことを、「わがあがないぬし」「わが力の岩」「わたしの及びがたいほどの高い岩」「のがれの岩」「わが心の力」「わが避け所の岩」と歌っている。ダビデの詩のなかで、神の恵みは、天の羊飼いが、その群れを導かれるみどりの牧場のなかの冷たい「いこいのみぎわ」としても描かれている。また、「あなたはその楽しみ川のの水を彼らに飲ませられる。いのちの泉はあなたのもとにあり」と彼は歌った(詩篇 19:14, 62:7, 61:2, 71:3, 73:26, 94:22, 23:2, 36:8, 9)。賢者ソロモンは、「知恵の泉は、わいて流れる川である」といった(箴言 18:4)。エレミヤにとって、キリストは、「生ける水の源」であり、ゼカリヤにとっては、「罪と汚れとを清める一つの泉」であった(エレミヤ書 2:13, ゼカリヤ書 13:1)。

イザヤは、キリストを描写して、「とこしえの岩」また「疲れた地にある大きな岩の陰のよう」であると言った(イザヤ書 26:4,32:2)。彼は、尊い約束を記録し、イスラエルのために流れた生きた水のことを、まざまざと思い起こさせている。「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることかない。」「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、」「……荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである。」「さあ、かわいている者はみな水にきたれ」との招待が発せられている(イザヤ書 41:17, 44:3, 35:6, 55:1)。また、聖書の終わりのほうでも、この招待がくり返されている。生命の水の流れは、「水晶のように輝」き、神と小羊のみ座から流れ出ている。「いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」という恵み深い招声は、各時代を通じて響きわたっているのである(黙示録 22:1,17)。(人類のあけぼの下巻 10, 11)。

1月19日

人間の肉体を取られた神

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。」(ヨハネ 1:14)

わたしたちは深遠な事柄を学ぼうと思うなら、地や天において、かつて起こったなかで最もすばらしい事柄、すなわち神の御子の受肉にわたしたちの心を向けよう。(SDA バイブル・コメンタリー [E・G・初巻・コメント] 7 巻 904)

キリストだけが、神性をあらわすことができた。…神ご自身が、人類にあらわされなければならなかった。これをなすために、わたしたちの救い主は、ご自分の神性に人性をまとわれた。主は人間の器官をおとりになった。なぜならこうすることによってのみ彼は人間に理解され得るからである。人間のことは、人間だけにしかわからないのである。救い主は、神がご自分のために用意された人間のからだを通して、神のご品性をあらわされた。(SDA バイブル・コメンタリー [E・G・初巻・コメント] 7 巻 924)

もし、キリストが神のお姿で来られたなら、人間はその光景に耐えることができなかったのである。きわだった相違が余りにも苦痛を与え、栄光は余りにも圧倒的すぎたであろう。人間は一人の純潔な輝かしい天使の前ですら、栄光に耐え得るものではない。それゆえキリストは天使の性質をもおとりにならなかったのである。主は人間の姿をとって来られた。(SDA バイブル・コメンタリー [E・G・初巻・コメント] 5 巻 1131)

彼を眺めることによって、わたしたちは目に見えない神を見る。このお方は人性を通して抑えられ、やわらげられた栄光を人間に投げかけることができるために神性を人性で覆われたのであった。それによってわたしたちの目をこのお方にとめても、わたしたちの魂がこのお方の曇りのない輝きに消滅させられないためである。わたしたちは、自分の創造主であり、贖い主であるキリストを通して神を見るのである。信仰によってイエスを瞑想し、人間と、永遠のみ座の間に立っておられる主を見ることは、わたしたちの特権である。主はわたしたちの祈りとささげものを神への霊的な犠牲としてささげてくださるわたしたちの弁護人である。イエスは、偉大な罪のないための供え物であり、彼の功績を通して、神と人間は、互いに交わることができるのである。

キリストは永久にご自分の人性を保たれる。主はわたしたち人類の代表者として、神の前に立たれる。わたしたちが、主の義という礼服を着せられるとき、わたしたちは主と一つになる。そして、主はわたしたちのことを「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩み続けるであろう。彼らはそれにふさわしい者である」と言われる(黙示録 3:4)。主の聖徒たちは、ほのぐらい覆いをはさまずにご自分の栄光に包まれた主を見るのである。(SDA バイブル・コメンタリー [E・G・初巻・コメント] 7 巻 925)

ベツレヘムの幼子

「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。(ルカ 2:11, 12)

わたしたちは、キリストがどのように、小さな無力な幼な子になられたかを理解することはできない。主は人の子らとは違った素晴らしい美しさで、地上に来られることもできた。主のみ顔は栄光で輝き、背は高く、優美であることもできた。主はご自分を見つめる者を魅了するような方法で来られることもできた。しかし、これは、主が人の子らの間に来られるよう神が計画された方法ではなかった。主は人類家族に、そして、ユダヤ民族に属する人々と同じようであるべきであった。主のみ姿は、他の人々の姿のようであるべきであり、人々が主を他の人々と異なった方として、注目するような美しさを持つべきではなかった。主は人類家族の一員として来られ、天と地を前にしているひとりの人間として立たれるべきであった。主は人間の立場を取って、人間のためにご自身を与えられ、罪人の負債を払うために来られた。主は地上で純潔な人生を送られ、そしてサタンが偽りを語ったのであること、すなわち人類家族は永久に自分のものであり、神も人間を自分の手から取ることはできないと主張したとき、それは偽りだったことを示されるのであった。

人間は最初に、キリストを赤ん坊として、また子供として見た。主の両親は非常に貧しく、主は貧しい人が持つものを除いては、この地上で何も持っておられなかった。主は貧しい人や身分の低い人が、赤ん坊から子供に、青年から大人になる課程で経験するすべての試みを通られたのである。…

わたしたちはキリストがこの地上で幼な子になられたということを、考えれば考えるほど、その事のすばらしさを知るのである。ベツレヘムのかいばおけの無力な幼な子が、神の聖なる御子であられるということが、どうしてありえることなのであるか。わたしたちはそれを理解できないが、諸世界を造られた方が、わたしたちのために無力な幼子になられたということを信じることができる。どの天使よりも高貴であり、天の御座の御父と等しく偉大であられたけれども、主はわたしたちと一つになられた。主にあって、神と人間は一つになった。この事実の中にわたしたちは自分たちの墮落した人類の希望を見出すのである。受肉されたキリストを見上げるとき、わたしたちは人性を取られた神を見上げているのであり、神の栄光の輝きであり、父なる神の真の姿を主のうちに見ているのである。(ユース・インストラクター-1895年11月21日)

1月21日

青年にとっての光

「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった。」(ルカ 2:40)

イエスの模範は青年にとっても成人にとっても光であった。なぜなら、主の少年時代と、青年時代は見本だったからである。主の幼年時代から、主の模範は完全であった。肉体的にも、精神的な活力においても、主がすべての若い人々に望まれるように、このお方は植物によって示される成長の神聖な秩序に従われた。主は天の君主であり、栄光の王であられたが、ベツレヘムで一人の幼な子となられ、しばらくの間、母親の保護のもとにある無力な幼児を代表された。少年時代には、主は従順な子供の務めを果たされた。主は大人の知恵ではなく子供の知恵で話し、行動された。主は両親を敬い、子供の能力で役に立つ方法で両親の希望を満たされた。しかし、成長の各段階において主は、罪のない生活の、単純で、自然な慎しみを持っていて、完全であられた。(ユース・インストラクター 1909年5月25日)

ヨセフと、特にマリヤは、自分の子供の神聖な御父のことを記憶にとどめていた。イエスは主の使命の聖なる性質に一致した教育を受けられた。正しいことに向かうイエスの傾向は両親にとって絶えまない喜びであった。彼が両親にされる質問により、彼らはもっと熱心に真理の偉大な原理を研究するようになった。主の自然と自然の神についての、人の心を動かす言葉は両親の心を開き、明るくした。

神の御子の目は家の周りの岩々や小山にしばしばとまった。主は自然の事物に良く通じておられた。主は天に太陽を、また、それぞれの使命を果たしている月や星をご覧になった。歌声をもって主は朝の光を迎えられた。主はひばりが、その神にさえずりたたえているのを聞かれ、賛美と感謝の声で、和した。(ユース・インストラクター 1898年9月8日)

主は静かで、おだやかで、他とは区別された方のように見えた。できる時はいつでも、主は自然の神と交わるために野や山に一人で出て行かれた。仕事が終わると湖畔や森の木々の間を、そして、緑の谷間を歩き回り、そこで神について考え、ご自分の魂を祈りによって天へと高めることがおできになった。(ユース・インストラクター 1895年12月5日)

宮にいた幼子

「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか。」(ルカ 2:49)

キリストが12才になられたとき、彼は過越の祭に出席するために両親と共にエルサレムに行かれた。そしてその帰りに彼は群衆の中ではぐれてしまった。ヨセフとマリヤは三日間主を捜した後で、宮の中で主を発見した。「教師たちの真ん中に座って、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞く人々はみな、イエスの賢さやその答えに驚嘆していた」(ルカ 2:46, 47)。(ユース・インストラクター-1898年9月8日)

両親は、主の洞察のするどい質問が聞こえたとき、驚いて聞き入った。…学ぶ者の態度をとっておられたけれど、キリストはご自分が出されるどのみ言葉にも光を分け与えられた。主はラビの暗くなっていた心に、聖書を解き明かされ、世の罪を取り除く神の小羊に関するはっきりとした光を彼らに与えられた。幼い生徒の鋭くはっきりした質問は彼らの鈍くなった理解力に光の洪水をもたらした。主が救いの計画の知識を受け、分け与えられたとき、真理が暗闇で光がはっきりと輝くように輝き出た。

キリストは知識においても成長されたとはっきり述べられている。キリストのご生涯におけるこの事件の中にすべての若者に対する何という教訓が見出されることであろう。もし、若者が神のみ言葉を勤勉に学び、聖霊を通して、天の導きを受けるなら、彼らは他の人々に光を分け与えることができるようになるであろう。…

イエスの母マリヤは「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」とたずねた。イエスが右の手をあげられたとき、人性を通して天の光が輝き出て、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」とたずねた。「しかし両親はその語られた言葉を悟ることができなかった」(ルカ 2:48-50)。彼らは主のみ言葉の本当の意味を理解できなかった。しかし、神の御子であつたけれども、主は両親と共に出て行き、ナザレに帰られた。そして、彼らに従われた。…12才の時に聖霊はイエスの上に宿っておられ、主はご自分がこの世に来られた使命の重荷が何かを感じられた。(サイズ・オブ・ザ・タイムズ 1896年11月30日)

1月23日

救い主と共にいなさい

「ところが、祭が終わって帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。」(ルカ 2:43)

キリストのご生涯のたった一つの行為といえども、重要でないものはない。主のご生涯のあらゆる出来事は、将来、主に従う者たちの利益のためであった。エルサレムにキリストが居残られた状況は重要な教訓をおしえている。…

イエスは人々の心をご存知であった。群衆が連れだってエルサレムから帰ると、謙遜や慎しみで味つけられていない会話や訪問がなされ、メシヤとその使命は、ほとんど忘れられてしまうということを主は知っておられた。それで、主は両親とだけでエルサレムから帰ろうとされたのであった。彼がいない間に、父と母は彼の将来の苦しみと死を伝える預言についてよく考え、瞑想する十分な時間を持った。主は、ご自分が世の罪のためにご自身の命をささげられる時に、両親がはじめて、予想もしないでその苦痛にみちた出来事にあうのを望んではおられなかった。主は彼らがエルサレムに戻る時も離れておられた。過越の祭の後で、彼らは三日間、悲しみながら彼を捜した。…

ここにキリストに従うすべての者に対する教訓がある。…クリスチャンが共に交わるとき、彼らの間でイエスが忘れられないように、そして、イエスが彼らの間におられないという事実を不注意に見過ぎてしまうことがないように注意深い言葉と行動が必要である。彼らは、自分たちの状態に目覚めるとき、彼らは、自分の心に平和と喜びを与えることのできるお方のご臨在なしに旅をしていたことを発見する。そして戻って、毎瞬間自分と共にいていただくべきであったお方を捜すのに何日も費やすのである。主のご臨在に無頓着な人々や、自分たちの救い主に関係のない会話にふける人々の一団にはイエスは見出されないであろう。…自分たちと共にイエスに居ていただくことはすべての人の特権である。もし彼らがそうするなら、彼らの言葉は慎しみで味つけられ、吟味されたものになるはずである。彼らの心の思いは、天と聖なる事柄を瞑想するために訓練されなければならない。(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホフ・コメント] 5 巻 1118, 1119)

全人類のための理想

「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」(ルカ 2:52)

キリストは若い時から労働者の生活を送られた。主の青年時代には父親と大工の仕事をされた。そして、このようにしてすべての労働を尊ばれた。主は栄光の王であられたけれども、つましい仕事に従事された実践によって、人類家族一人一人の怠惰を譴責し、すべての労働をキリストのように品位のあるものとされた。…少年時代から主は服従と勤勉の模範であられた。主は家庭の中で、気持ちの良い日光のようであられた。…

主の知恵は学者たちを驚嘆させるものであったが、彼は柔和に、人間の保護者にご自身を従わせられた。…主が、日毎に、ご自分のすばらしい使命について得ておられた知識は、主が最もつましい仕事を果たされるのを妨げなかった。主は貧困に圧迫されているつましい所帯に住む若い人々に負わされる仕事に快活に従事された。主は子供たちの悲しみや試練を負われたので彼らの誘惑を理解された。義を行うという主の目的は断固としたものであり、不動のものであった。悪にそそのかされても、最も厳格な真理や、正直からわずかといえども離れることを拒まれた。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1896年6月30日)

キリストは全人類の理想である。主は完全な模範を子供たちや若者、そして大人のために残された。主はこの地上に来られ、人生のさまざまな段階を通られた。

彼は、どんな悪をもなさらなかったが、他の子供たちや若者のように語り、行動された。罪はキリストのご生涯のどこにもなかった。主はいつも天の純潔の雰囲気の中で生活された。…

家庭の聖所において、イエスは単に両親からだけでなく、天の父から教育を受けられた。主が成長していかれるにつれて、神は主の前にある偉大なみわざを主にだんだんと知らされた。しかし、このような知識にもかかわらず主は高慢な態度をとられることは決してなかった。主は両親を敬い、従うことを喜んでおられた。主はご自身の大きな使命を知らないわけではなかったが、両親の希望を聞いたり両親の権威に従われたのである。(SDA パイブル・コメンタリ [E・G・ホフト・コメント] 5 卷 1117, 1118)

1月25日

キリストのバプテスマの意義

「そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところきて、バプテスマを受けようとした。」(マタイ 3:13)

多くの者が自分たちの罪の悔い改め、告白のバプテスマを受けるために彼(ヨハネ)のところに来た。…キリストはご自身の罪を告白しに来られたのではなかったが、罪人の身代わりとして有罪宣告が彼に負わせられるためであった。主はご自身のためではなく、罪人のために悔い改めに来られたのである。…キリストはこの儀式にあずかることによってバプテスマの式を尊いものとされた。この行為において、主は人間の代表、また頭として、ご自身をご自分の民と同一にみなされた。人間の身代わりとして、主は彼らの罪を引き受けられ、ご自身を罪人として数え、罪人が取るように要求されている段階を踏み、罪人がしなければならぬ働きをなさった。…

キリストが水から上がられた後…ヨルダンの岸に上がって来られ、祈りをなさるために頭をたれた。…信者の模範として、主の罪のない人性は、天の父からのささえと力を嘆願された。それはまたメシヤとしての公の仕事を、始められるためでもあった。…

これまで、天使は、主がバプテスマで、おささげになったような祈りを聞いたことがなかった。彼らは御父から御子へのメッセージを伝える者になりたいと熱心に願った。しかし、それはかなえられなかった。主の栄光の光は御父から直接に出た。天は開かれ、栄光の光が神の御子の上にとどまった。それは、磨かれた金のように、鳩の形をしていた。鳩のような形はキリストの柔和と優しさを象徴していた。…開かれた天から「これはわたしの愛する子…わたしの心にかなう者である」というみ言葉があった。…神の御子は人性をまもっておられたけれども、エホバはご自身の声で、このお方が永遠にご自分の御子であることを保証された。御子に対するこの表明によって、神は人を、ご自分の愛する御子の卓越さを通して高められたものとしてお受け入れになるのである。(ビュー・アッド・ヘラド 1873年6月21日)

ヨルダンの岸の御子キリストの祈りは、ご自分を信じるすべての者を含んでいる。あなたが、神の愛される御子にあつて受け入れられるというみ約束は、あなたのものになるのである。神は「これはわたしの愛する子、…わたしの心にかなう者である」と言われたのである。…キリストはあなたのために永遠の神のみ座への道を切り開かれたのである。(SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1079)

荒野の誘惑

「さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。(マタイ 4:1)

なぜ、公の伝道の始めに、キリストは試みられるために荒野に導かれたのだろうか。…主が行かれたのは、ご自身のためではなく、わたしたちのため、勝利をわたしたちのものにするためであった。主は人類の代表として試みられ、試されるべきであった。…主は個人戦で敵に直面し、この世の王国のかしらであると主張している敵を打ち負かさなければならなかった。(手紙 159、1903)

サタンは人間が誘惑されるはずの点で主に対面し、誘惑した。わたしたちの身代わりであり、保証人であられる主はアダムがつかずき、倒れた立場にさしかかられた。そして、問題は、アダムが神に戒めについてそうしたように主はつかずかれ、倒れるだろうかということであった。主はサタンの攻撃に、繰り返し「こう記されている」というみ言葉で対抗された。そして、サタンは、勝利した敵を戦場に残して立ち去った。キリストはアダムの不名誉な墮落を贖い、完全な従順の品性を完成し、人類家族のための模範を残された。…もし、主が神の律法に関して一点といえども失敗されたならば、主は完全な犠牲とはなり得なかったであろう。なぜなら、アダムが失敗したのはただその一点だけであったからである。

…

わたしたちの救い主は誘惑の試みのどの点においても負けなかった。そして、この方法で、彼は人のために勝利を可能にしてくださった。さて、このことを思い、考えるならば、わたしたちの日々の生活は、十分な感謝で心が満たされる。イエスが、わたしたちの身代わり、保証人として受け入れられたので、わたしたち一人一人は、あたかもわたしたちが自分自身のために試みと試練に耐えたかのように受け入れられるのである。主は人間が攻撃されるはずの試練に精通するためにわたしたちの性質をおとりになった。それで、主は、御父の前にわたしたちの仲介者また仲保者となられたのである。(ビュー・アソッド・ワルド 1890年6月10日)

勝利を得たいと思う者は、自分の持っている全ての力を用いるべきである。彼らは神の前にひざまずいて、天の力を求めて魂を悩ませなければならない。…人間は悪に抵抗する力、すなわち地上や死、また地獄が支配することのできないところ、キリストが勝利されたように彼らが勝利できるところに自分を置く力を持つことができる。神性と人性が彼らの中で結合されるのである。(SDA バイブル・コメント [E・G・ワット・コメント] 5 巻 1082)

1月27日

罪のない生涯

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。」(ヘブル 4:15)

誘惑の荒野で、救い主が、わたしたちのため、どれほどの価を払って、狡猾な、悪意のある敵と戦われたかを考えてみよう。すべてはさまざまな誘惑によってキリストに勝利するための企てに成功するか失敗するかにかかっていることをサタンは知っていた。サタンはアダムが耐えることに失敗した試みに、もしキリストが耐えるなら救いの計画は成就へと進んで行き、サタンは自分の力は取り去られ、その滅びが確かになるということを知っていた。サタンの誘惑は卑しい人間の性質に最も効果的であった。なぜなら人間はその誘惑の強力な影響に対抗して立つことができなかったからである。しかし、キリストは人間のために、人間の代表として、神の力に全的に頼りながら、わたしたちの完全な模範となられるために、厳しい戦いに耐えられた。そこに、人間にとつての希望がある。…わたしたちの前にある働きはキリストが勝利なさったように勝利することである。主は40日間断食され、この上なく鋭い飢えの痛みに苦しまれた。キリストはわたしたちの理解を越えて、わたしたちのために苦しまれた。それで、わたしたちはキリストのために、わたしたち自身の試みと苦しみを喜んでむかえるべきである。そうすれば、わたしたちはキリストが勝利されたように勝利することができ、また、わたしたちの贖い主のみ座に上げられるであろう。…

わたしたちは強敵との戦いで勝つために必要なものはすべて持っている。だから、わたしたちは、サタンの誘惑に一瞬といえども負けたりはしない。わたしたちは自分自身の力では、勝利することは不可能であることを知っている。しかし、キリストがご自身を低くされ、人間の性質をおとりになった時、主はわたしたちの必要としているものをよくお知りになった。そして、人間が負わなければならない最も激しい誘惑をご自身でお負いになったのは、人間が勝利者になる方法を学ぶことができるために、サタンの暗示に抵抗して、敵を征服されたのである。主はわたしたちと同じように肉体をまとわれ、あらゆる点で人間が苦しむことを、それ以上に苦しまれたのである。わたしたちは、キリストが苦しまれたようには苦しむよう要求されはしないであろう。なぜならキリストには一人の罪ではなく全世界の罪が置かれたのだから、主は、ご自分の模範に従うことによってわたしたちが、すべてのものを受け継ぐことができるために、身分の低さ、恥辱、苦しみ、死を耐え忍ばれたのである。(ビュー・アソド・ハルド 1895年2月5日)

キリストは試みられ、苦しまれた

「確かに、彼は天使の性質を帯びることをなさらずアブラハムの子孫をご自身のものとされた。」(ヘブル 2:16 英訳)

わたしたちは、キリストの服従そのものを主の特別な神聖によって、特別に身につけられた何かであると考えする必要はない。なぜなら主は人間の代表として神の前に立ち、人間の身代わり、また保護者として試みられたからである。もし、キリストが、人間の持つことの許されない特別な力を持っていたならば、サタンはこの問題を利用したのであろう。キリストのお働きは、サタンの主張する、人に対するサタンの支配を取り去ることであった。そして、主は人間、すなわち一人の人間として試みられ、人間の服従を示すという方法においてのみ、これをなすことができたのである。(SDA バイブル・コメント [E・G・柯什・コメント] 7 巻 930)

わたしたちは、キリストは「試練を受けて苦しまれた」(ヘブル 2:18) というみ言葉の意味を十分に理解できたであろうか。主は罪の汚れはなかったけれども、主の聖なる特質である、純化された感性は悪との接触で、言葉であらわすことのできない苦痛を受けられた。彼は人間の性質を取っておられたけれども、大背教者と顔と顔を会わせ、単独で主のみ座の敵と対抗された。単に心配だけでなく、キリストは誘惑の力に負けるということもあり得たのである。

サタンは人間の心の中に、何か足場を得ることのできるある点を知っている。ある罪深い欲望が大事にされる。それによってサタンの誘惑がその力をあらわす。しかし、キリストは、ご自身について、「この世の君が来る…だが、彼はわたしに対してなんの力もない」(ヨハネ 14:30) と宣言された。誘惑の嵐が主を襲った。しかし、それらは主を神に対する忠誠から引き離すことはできなかった。キリストに従う者はすべて、彼らの主を攻撃したのと同じ悪意をもった敵と遭遇しなければならない。驚くような巧みさでサタンは自分の誘惑を人々の環境や気質、また精神的、道徳的傾向や強い感情に合わせてくる。サタンは人の子たちの耳に、世の快樂や利益や名誉に注意を向けるようささやいている。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」と。わたしたちはキリストを見上げ、キリストが抵抗されたように抵抗しなければならない。もしも主が勝利されたようにわたしたちも勝利したいのなら、わたしたちは主が祈られたように祈り、主が悩まれたように悩まなければならない。(ビュー・アンド・パウル 1887 年 11 月 8 日)

1月29日

わたしたちの聖なる贖い主

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず」(ピリピ 2:6)

イエス・キリストは、「神と等しいというこのことを固守しておきたいとお思いにならなかった。」なぜならば、神性だけがへびの毒が入った傷から人間を回復させるのに有効であったからである。神ご自身が、そのひとり子において、人間の性質をおとりになり、人間の性質の弱さにあつて、神のご品性を保たれ、あらゆる点において、主の聖なる律法を守られ、人間の子らのために天罰と、死の判決をお受けになった。これはなんとという思いやりであろうか。世界が造られる前に、父と一つであられた方は、罪によって失われ滅んだ世界を、それほどまで憐れまれて、ご自分の命を、世界のための贖いとして与えられた。御父の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であられた主は、義が完全に全うされ、それ以上を必要としなくなるまで、人間の罪の刑罰に苦しみながら、木にかかって、わたしたちの罪を、ご自分のからだに負われたのである。わたしたちのために果たされた贖いは、なんと偉大なものであろう。御子を信じる信仰を通してわたしたちに命と不死とをもたらすために、神の御子が十字架上の残酷な死をとげられたという事は何と偉大なことであろう。

この驚くべき課題、すなわち神はどのように義であり、かつ罪人を義とすることがおできになったか、ということは人の認識の範囲を越えている。わたしたちが、それを充分理解しようと試みる時、それは、わたしたちの理解を越えて、広く深くなる。わたしたちがカルバリーの十字架を、信仰の目で眺める時、そこで、弱さと恥辱の中にかけられている犠牲の上に置かれた、わたしたちの罪を見る時、すなわち、それが神、永遠の父、平和の君であるという事実をはっきりつかむとき、わたしたちは「どんなに大きな愛を父から賜ったことか」(ヨハネ第一 3:1) と叫ぶようになるであろう。…

人間が、万物の主の気高いご品性をはかり、また、永遠の神と有限な人間性の間の相違をはかることができるならば、人間を、不服従によって墮落したところから神の家族の一人となるようにしてくださる天の犠牲が、どれ程偉大なものであつたかを、人間は知るであろう。…キリストの神性は、わたしたちの永遠の命の保証である…世の罪を負われるその方は、聖なる神との和解をしてくださるわたしたちの唯一の仲介者である。(ユース・インストラクター 1897年2月11日)

天の軍勢の驚き

「かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず」（ピリピ 2:7）

わたしたち一人一人が、人性をとられたキリストのご生涯の意味を知ろうと研究するのは、重要なことである。それは、わたしたちにとってどのような意味があるのであろうか。すなわち、神の御子はなぜ天の宮廷を去られたのであろうか。なぜ主は、ご自分の命令で、行ったり来たりする天の使いたちの指揮官としての地位から降りて来られたのであろうか。なぜ主は、ご自分の神性に、人性を着られ、いやしい姿で、低い身分で、わたしたちの救い主として、世界に来られたのであろうか—これらを学ぶことは大切なことである。

キリストが地上に来られ、なされたようにすること、すなわちこの地上での主のご生涯は、天の宮廷における主の栄光とは、比較にもならない相違を持つ貧しい生活をされるべきであったということは、天の万軍の驚きであった。主は多くのみ使いを連れておいでになることもできたのである。…

天の宇宙の前で、キリストはご自身に人間の姿をとって地上の身分の低い人たちの間に立つために身を落とされた。それにより主は、人がいる所で彼らに接し、戒めや模範によって彼らを教えられた。人は貧しい、しえたげられた人々の間にあっても、純潔で、真実で、気高くあり得るのである。人生や品性は、貧乏や、身分の低さの中で、汚されるものではないということをあらわすために主はこの世に来られた。池の水面に咲いた睡蓮は、雑草や、見苦しいごみに囲まれているかも知れないが、しかし、汚れなく、それは日光に向かって香ぐわしい白い花を咲かすのである。その、睡蓮は水分を吸い上げる茎を、汚れた水を通して、清い地下の砂に到達させるのである。この花は汚すことになるすべてのものを拒み、傷のないかぐわしい花に成長するような材料だけを自分に集めるのである。

ゆりは人間の間におられるキリストを表す。主は、呪いですべてが麻痺させられ傷つけられた世界に来られた。しかし、主は、ご自分のまわりのものによって汚されなかった。主は、光であり、命であり、道であられた。主は、ご自身の意志で地上の一人の住民になられ、主のあわれみ深いみ手に全世界をしっかりとつかまえられ、天の御父の腕に、それをおおきになるのである。なんという愛が、この犠牲にあらわれたことであろう。主ご自身が、アダムの墮落した、むすこ、娘たちを助けるために来られたのである。（ユース・インストラクター 1897年1月31日）

1月31日

謙遜の偉大さ

「おのを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」(ピリピ 2:8)

キリストは、栄光の回復させる力によって、人間が高められるようにと、神の栄光をあらわすためだけの目的で、この世界においてになった。すべての力と恵みが、主に与えられた。キリストの心は、生ける水の源、また枯れることのない泉であり、ご自分のまわりにいる者に豊かで、清らかな流れをいつも溢れさせる用意ができておられた。主の全生涯は、清く私心のない、慈愛深いご生涯であられた。主の動機は愛と、同情に満ちていた。主は、ご自分に従う者たちが求め、あるいは考えられる以上のことを彼らのためになされることを喜んでおられた。弟子たちのためにする主の絶え間ない祈りは、彼らが真理によって清められることであった。そして、全能の神のご命令が、世の造られる前に与えられていたことを知っておられたので、確信をもって祈られた。主はみ国の福音が全世界に伝えられることを知っておられた。聖霊の無限の力によって武装された真理は、悪との争いにおいて悪を破るであろう。そして、血に染むみ旗は、ある日、主に従う者たちの中で勝ち誇ってはためくであろうということを知っておられた。

しかし、キリストは、非常な謙遜のうちに来られた。主はこの世界におられた時、ご自身を楽しませるのではなく、「おのを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」ご自分に従う者たちに対して、主は、「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」と言われた(マタイ 11:29)。

真の謙遜の根から、最も大切な心の偉大さ、すなわち、人をキリストのみ姿に一致させるように導くという偉大なことが芽を出す。この偉大さを持っているものは、忍耐と、神への信頼を得る。彼らの信仰は、不屈である。彼らの真の献身と信心は、自己をあらわさないようになる。彼らのくちびるから出る言葉は、キリストのような柔和と愛の表現にかたちづくられる。彼ら自身の弱さを知るとき、彼らは、主が彼らに与えてくださる助けを感謝し、正しく真実であることを行うことができるように、主の恵みを嘆願する。彼らの行いや態度、また精神によって、彼らがキリストの学校の生徒であるという身分証明書をたずさえることになるのである。(ビュー・アンド・ヘルド 1897年5月11日)

研究 9

神の憐れみの最後の招き



「永遠の福音における 第三天使の大いなる叫び」

永遠の福音における第三天使の大いなる叫びの位置と内容

今回は、永遠の福音における第三天使の大いなる叫びを見てみましょう。

このメッセージは、「永遠の福音」の一部です。

そのメッセージが宣布された 1844 年以降、先駆者たちが伝えたのは安息日でした。つまり、黙示録 11:19 にある契約の箱が開かれたときに、彼らはキリストと自分たちとの間の関係を示す生ける神の印を知り、この日に主に礼拝するようになりました。そして、この安息日の中にキリストを見いだしたので、喜びに満ちた彼らは力を尽くしてこれを伝えたのでした。その第三天使のメッセージは、いつから獣の刻印になったのでしょうか？

終わりの時代に約束されている後の雨、すなわち聖霊の雨が与えられるのは、この安息日を徹底的に伝えるためなのです。

過去にも同じ失敗が見られなかったでしょうか。

モーセの時

エジプトから出て、カナン（乳と蜜の流れる地）にわたしが導くというのが神のみ約束でした。しかし、イスラエル人はつねにエジプトを見て、つぶやいていたのでした。そして、エジプトだけを見ていた者は、そのまま荒野で死にました。彼らはカナンでもエジプトでもない場所で 40 年さまよいました。これがどちらにもつかない中途半端なクリスチヤンの状態です。

1844 年以来

ヘブル 4 章では出エジプトでの失敗を指摘し、二種類の安息、すなわち安息

日と天の休息に入るように伝えられています。しかし、いつも獣の刻印と獣の像を見て、伝える人々がいます。

「それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ存続しているにもかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか。というのは、彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが、聞いた者たちに、信仰によって結びつけられなかったからである。ところが、わたしたち信じている者は、安息にはいることができる。それは、『わたしが怒って、彼らをわたしの安息に、はいらせることはしないと、誓ったように』と言われているとおりである。しかも、みわざは世の初めに、でき上がっていた。すなわち、聖書のある箇所、七日目のことについて、「神は、七日目にすべてのわざをやめて休まれた」と言われており、またここで、『彼らをわたしの安息に、はいらせることはしない』と言われている。そこで、その安息にはいる機会が、人々になお残されているのであり、しかも、初めに福音を伝えられた人々は、不従順のゆえに、はいることをしなかったのであるから、……こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである』（ヘブル 4:1-6, 9）。

では、わたしたちの時代のための根拠は何でしょう。それはまさに、この黙示録 11:19 です、「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた…」。

安息日は、エジプトから導き出されて神の子とされた者が守るものです。「あなたはバロに言いなさい、『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。』わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。」（出エジプト記 4:22, 23）。「あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕をもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである」（申命記 5:15）。

エジプトにいながら、安息日を守ることはできません。さらに本当の安息（天のカナン）に入るために、安息日を徹底的に伝えました。安息日は、神の子の特権です。神がわたしとあなたがたとの間のしるしだと言われます。従って、神の子として生まれる経験、すなわち信仰による義認の経験がなければ、安息日を守ることはできないのです。

その経験が次のみ言葉にあります。

「疑問が生じる。では、どうなのか。わたしたちが救いを受けるのは条件によってであろうか。わたしたちがキリストの許へ来るのは、決して条件によらない。ではわたしたちがキリストの許へ来たら、そのとき条件は何であろうか。それは生きた信仰によって、完全にあますことなく、十字架につけられ、よみがえられた救い主の血の功績をつかむことである。わたしたちがそうするとき、わたしたちは義のわざを行うのである。しかし、神がわたしたちの世において罪人を呼び招いておられるとき、そこには条件がない。このお方はキリストの招きによって引き寄せられる。そしてそれは、神のみ許へ行くために、今度はあなたが応じなければならないというものではない。罪人は来る、そして彼は来て、カルバリーの十字架の上にあげられたキリストを見る。それを神が彼の心に印象づけられる。そこには、彼がつかんでいたと思ったものを越えた愛がある。……

キリストは境界線を越えていないすべての人を引き寄せておられる。このお方は今日ご自分の許へ引き寄せておられるのであり、どんなにおそろしい罪人であろうと、このお方が彼を引き寄せておられるのである。そして罪人が自分の腕をカルバリーの十字架に固定させることができると、そのとき彼には罪の自覚がない。彼はなぜそこにいるのであろうか。なぜなら、律法が犯されたのである。そして彼は自分が罪人であることを認め始める。キリストは律法が犯されたために死なれた。そのとき彼は、罪人をその罪と不法から清めることのできる唯一のものとしてキリストの義を見始める。

今、わたしたちはこのことに関して知的な知識を持ちたいのである。そのとき、わたしたちは生きた信仰によってイエス・キリストの義をつかみ、自分たちが何もでもないことを知りたいのである。わたしたちは自分の能力の限りを尽くして働くかもしれないが、自らのうちに一つの徳も作りだすことはできない。それができるのはキリストの義だけである。そうであれば、わたしたちがキリストの義の衣に覆われるとき、わたしたちには与えられた力と強さがあり、罪を犯そうとは思わなくなる。わたしたちは、キリストの義をもって、すなわち、キリストがわたしたちと共に、わたしたちによって働いて下さるところへ自らの身を置きながら、罪を犯すことはできないのである。わたしたちは間違いを犯すかもしれない。過ちを犯すかもしれない。しかし、これらの罪—わたしたちが神の律法の違反者であったために、わたしたちにかわって神の御子を苦しませた罪—を憎むのである」(原稿リリース6巻32)

い主が彼らの同情と祈りを最も必要としておられた時に、彼らは眠っているところを見られたのです。ペテロでさえ眠っていました。

イエスの胸に寄りかかっていた愛する弟子ヨハネもまた眠っていました。実際、ヨハネはこのお方に対する愛から目を覚ましていたべきでした。このお方の恐ろしい苦しみの時に、彼の熱心な祈りが愛する救い主の祈りに加えられるべきでした。贖い主は彼らの信仰が試練の時に衰えることがないように、ご自分の弟子たちのための祈りに一晩を過ごされたことがありました。それにもかかわらず彼らは一時間でさえもこのお方と共に目を覚ましていることができませんでした。

キリストが今ヤコブとヨハネに「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」とお尋ねになるなら、彼らは前のようにためらうことなく「できます」とは答えなかったでしょう(マルコ 10:38, 39)。

救い主の心はご自分の弟子たちの弱さにあわれみと同情を感じられました。このお方は彼らがご自分の苦しみと死がもたらす試練に耐えることができないのではないかと心配なさいました。

しかし、このお方は彼らの弱さを厳しく責めることをなさらないで、彼らの前にある試練についてを思い、言われました。

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」。

このお方は彼らのこのお方に対する義務の怠慢をゆるそうとなさいました。「心は熱しているが、肉体が弱いのである」(マタイ 26:41)。なんとという優しさの模範、愛情あふれるあわれみの救い主でしょう！

ふたたび神の御子は、超人的な苦悩に陥りました。気を失いそうに力尽きて、このお方はよろめきながら戻られ、前に祈られたように祈って、

「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」(マタイ 26:42)。

インド風天ぷら パコラ

■材料（2～3人分）

じゃがいも 1つ

カリフラワー 1/3

その他お好みの野菜（玉ねぎ、ナス、ズッキーニなど）少々

●ひよこ豆の粉（なければ小麦粉） 1カップ

●ガラムマサラ 小さじ1

●コリアンダーパウダー 小さじ1

●クミンシード 小さじ1

●ターメリック 小さじ1

●塩 小さじ1

水 1カップ

■作り方

1. じゃがいもは5-7mmほどの薄切り、カリフラワーは小さめのふさに分けます。
その他の野菜があれば一口大に切ります。
2. ●の材料をボールでまぜ、水を加えてかき混ぜます。水の量は調節してください。
3. 切った野菜を天ぷら生地につけて、中火で揚げていきます。
4. じゃがいもに箸をさして、やわらかくなっていたらできあがりです。
野菜を大きめに切る場合は、あらかじめ軽くゆでてから揚げるとよいです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第34話

ゲッセマネにて(II)

苦しみの内にあつて、キリストは冷たい大地にしがみつかります。このお方の青ざめた唇からは「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい」との痛々しい叫びがもれます(マタイ 26:39)。

一時間キリストはこの恐ろしい苦しみにお一人で耐えられました。それからこのお方は、同情の言葉を望んで、弟子たちのもとに来られました。しかし、同情の言葉は一言もありませんでした。彼らが眠っていたからです。彼らはこのお方のみ声で目が覚めましたが、このお方だとはほとんどわからないほどでした。苦悩のためにこのお方のみ顔はそれぐらい変わってしまいました。このお方はペテロに呼びかけて言われたました

「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていられなかったのか」(マルコ 14:37)。

キリストは園のほうへ足を向けられる直前に、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう」と弟子たちに言っておられました。彼らは牢獄にでも、死に至るまでも共にいきますと最大限の保証をしていました。そして気の毒にも自信の強いペテロは、「たとい、みんなの者がつまずいても、



わたしはつまずきません」と付け加えていました(マルコ 14:27, 29)。

しかし、弟子たちは自分自身に信頼していました。彼らはキリストに勧告されていたように大いなる助け主を見ていませんでした。そのため、救

(43 ページに続く)